

じょうこうじ 掟光寺だより

令和4年
7月号

行事案内

●7月4日(月)

「虫祭り、清正公、鬼子母神会」

13時30分から

●7月31日(日)

「無縁墓そうじ」

7時00分から



仏教たとえ話

せつせんどうじ らせつ
【雪山童子と羅刹】

ねはんぎょう
涅槃経というお経に説かれてい

る、お釈迦さまの前生のお話です。

お釈迦さまが過去世に雪山童子
という名で雪山に住んでいた時の
こと、つくづくと世の中の無常を
観じて、ひとえに仏法を求めると
か救われる道はないと発心しまし
た。

その時、帝釈天が雪山童子を見
て、その発心は本物かどうか試そ
うと思い、羅刹の姿となって、童
子のそばに立ち、「諸行無常、
是生滅法」という偈文を説きまし
た。

(※羅刹とは人を食べるといふ鬼
のこと)

童子はこれを聞いてこれぞ真の法
だと思いましたが、ぜひともその
次の文句が知りたいものだと思
い、前を見ると一人の羅刹がいま
した。

そこで呼び止めて、「あなたはこ
の次の句を知っているのですか？」
というとき、羅刹は「私はこれを知
てはおるが、飢えに苦しめられて
説くことができぬ、食うべきもの
さえあれば、汝の為にこの法を説
こう」と答えます。



羅刹は人を食らう鬼ですから、そ
の飢えを満たすには、雪山童子は
自らの身を与えるほかありません。
しかし童子は命に代えてまでも、
残りの偈文を知りたいと思ひ、
「残りの偈を説いてくれたら、我
が身をあなたに与えよう」と言
いました。

そして羅刹が、次の「生滅々已、
寂滅為楽」の句を説くのを聞き終
つて自らその身をなげうって羅刹の
食となった。



◆これが有名な「雪山偈」
「無常偈」といわれる故事因縁。

「諸行無常、是生滅法、生滅々已、
寂滅為楽」とは、もろもろのすが
たかたちはすべて無常であり、生
じては滅していくのが定め。生ず
ることもなく滅することもなく、
まったく静まっていることが本当
の安らぎである、という意味。

人の身はたしかに形あるものとし
て、いつかは滅び去ってしまいま
す。しかし、仏法における身心と

は、三世(過去世・現世・未来世)
十方(宇宙のあらゆるところ)に遍
満して、ところとして到らないと
いうことはなく、また仏法のい
のちに、わたしのもの、だれのも
のという区別はないと考えます。

人は五蘊(ごうん)仮和合(けわごう)の身。言葉自体
は難しいですが、簡単に言えば、
「わたし」という存在は因果が積
み重なった「集合体」ということ
です。

個々の命と仏法全体のいのちの
関係は、「海の水と波の関係」に
似ています。波はわたしたち個々
のいのちで、それは生じたり止ん
だりします。しかし海の水は無
くなりません。生と死が波のよ
うに生じたり滅したりしても、仏
法のいのちは大海のように漫漶(まんか)
水を湛(た)えて、その海底は常に静寂
そのものです。

そして、この仏法のいのちは一
人一人に具わっており、この身こ
のまま仏の永遠のいのちであると
見きわめておられるのがお釈迦さ
またちで、波の生じたり止んだり
する様にばかり、とらわれている
のが私たち衆生(しゅじょう)です。

